

第  
門

日清戦役の外交史料ハ為  
ヨリモソノトモ未タ  
校閲ナシカス  
函部稿

韓露兩國交戦状態成立時期関連事實

外務省



韓露兩國交戦状態成立時期ニ

関スル事實

韓露兩國ノ交戦状態ヲ以テ日露ノ開戦ト同時ニ成立シタルモノトナストキハ單ニ日露ノ開戦期ヲ講究スルヲ以テ足レリト雖モ韓露兩國ノ交戦状態成立期ヲ以テ日露ノ開戦期ト異レルモノトナストキハ其時期果シテ何レニアルヤヲ決スルニツキ最も重大ナル關係ヲ有スル事實四アリ即ケ(一)日本カ初メテ韓國ニ兵ヲ入レタル時期(二)日韓議定書ニ調印セラレタル時期(三)韓國カ露國トノ條約ヲ廢棄ヲ宣言シタル時期及(四)韓國軍隊ト露國軍隊トノ間ニ戦鬪ヲ開キタル時期是ナリ

外務省

日本カ初メテ韓國ニ兵ヲ入レタル時期

明治三十六年十二月日露ノ談判漸ク危急ニ迫ルヤ  
韓國京城ニ於テハ帝國ハ愈々自由行動ヲ採ルニ  
決シタリトノ凡説盛ニ行ハレ露國公使ハ同月十七  
日附ヲ以テ韓國外部ニ對シ日本軍隊上陸セリ  
トノ凡聞ニキ確ル所アリ又其後在韓公使林權  
助ニ對シテモ同様ノ照會アリシカハ同公使ハ右ノ憲  
兵ノ交代及電信隊ノ上陸ノ誤傳ナルコトヲ回答セ  
リ同月末ニ到リ韓國駐劄隊演習用並ニ豫  
備交換用トシテ機関砲外若干ノ工兵材料ヲ同  
國駐劄隊司令部ニ送附セリ

露國公使ハ帝國政府ノ韓國ニ對スル態度ニ関  
シ精密ナル觀察ヲナシ万一必要ノ場合ニハ我ノ  
行動ヲ阻止シ若クハ之レニ對抗スヘキ手段ヲ研究  
シ韓廷モ亦我政府カ鞏固ナル決心ヲ以テ韓國  
ニ臨ムニ至ルヘキヲ推知シ多少動搖スルニ至レリ

外務省



茲ニ於テ林公使ハ再三帝國政府ニ具申スルニ自  
由行動ヲ採ルニ決シタル以上ハ速カニ其實行準備  
ヲ完成スルヲ以テ目下ノ狀況ニ照シ其ノ宜ヲ得タ  
ルモノナルコトヲ以テシ若シ其準備未タ整ハサルニ先  
チ露國ノ勢力韓廷ニ伸張スルカ如キコトアラハ大  
局ニ於テ甚タ不利ヲ蒙ルヘク前述ノ如キ軍需品  
ノ輸送ニシテ果シテ我自由行動ニ關聯スルモノナル  
以上軍隊ノ輸送モ亦不遠實行セシメラレタキヒ日

外務省

ヲ以テセリ

既ニシテ同月下旬ニ至リ駐韓英米公使ハ日露ノ  
愾商モ平和的解決ノ絶望ニ歸シタルヲ推測シ韓  
國內一般ノ秩序ハ日本ニヨリテ維持セラルコトヲ  
信ストモ公使館ノ護衛及其臣民財産ノ保護  
トシテ多少ノ兵員ヲ入京セシムヘキ旨ヲ通牒シ来レリ  
又他才ニ於テハ露兵入京ノ風説盛行ハルニ至レル  
ヲ以テ林公使ハ一月四日在ノ電信ヲ小村外務大臣



ニ送レリ

第十号信

前電ノ如ク米國公使館ニ於テ護衛兵ヲ附スルニ至リ  
タルハ米國公使ノ意見ノ如ク稍時機ニ先ケタル觀アレ  
トモ右ノ結果ハ韓廷ヲシテ時局ノ甚ク切迫セルヲ信  
セシムルニ至ルヘキヲ故ニ此際帝國政府ニ於テ速ニ  
韓國内少クトモ京城ニ於ケル我兵力ヲ増加シ韓  
廷ヲシテ實力上我ニ信賴スルノ政畧ヲ採ラサルニ

外務省

於テハ韓廷ハ凡説ノ如ク都ヲ他ニ移シ若クハ他國公  
使館ニ逃竄スルニ至ランモ測ラレス殊ニ露國公  
使ノ立場トシテ此際同シク公使館護衛兵ヲ上  
陸セシムルモノト推察シ得ヘキヲ故ニ萬一斯カル事  
態ニ至リ我ニ從來ノ態度ヲ守ルニ過キサルトキハ  
本使カ從來熱心ニ勸誘シ居ル如ク韓廷ヲシテ  
我ニ昵近セシムルノ政畧モ遂ニ水泡ニ帰スルニ至ル  
ノ慮アリ故ニ此際速ニ露國ニ對シ從來前日

露商ハ協約ヲ簽棄スルノ宣言ヲナスト同時ニ  
京城守備隊ノ員數ヲ増加セラレンコトヲ希  
望ス 現在ノ兵力ヲ以テ一面ハ匪民ヲ保護シ  
他面ニ韓帝逃竄ヲ豫防スルハ殆ト不  
可能ノ事ニ屬スルニ付キ本使ノ前段申立  
テハ本使ノ立場トシテ默止シ難キ所ナリ依テ  
右帝國政府ノ商議ヲ希望ス

外務

本使ハ此際十分ナル注意ヲ以テ韓廷ヲシテ我  
ニ信賴セシムル様勸誘ヲ續ケ居レド帝國政  
府ニ於テ前段本使ノ申立ヲ容ラレサル以前  
ニ韓帝ニシテ萬一他ニ逃竄セラルルニ至ラ  
ハ韓國内ノ秩序ハ直ニ紊乱スヘキニ付万  
一其場合ニ際セハ速カニ我ニ於テ秩序維持  
ノ責任ヲ自ラ取ルヲ要ス 本國政府ノ意見  
ヲ代表スルヤ否ヤハ知ラサルモ英米兩國公使  
ハ全ク帝國政府ノ右様ノ措置ニ出ツルヲ

当然、事トシ又佛國公使ノ態度モ可成此  
際ノ混雜ニ立入ラサルカ如シ

既ニシテ五日米國水兵三十六名曹長六名京城  
ニ入り續テ六日露國將校三名兵二十名八日  
ハ英國將校一名海兵二十名入京セリ爾來佛  
伊白等列國ノ軍隊續々入京シ露國ノ如キハ  
十二日迄ノ將校六名兵九十八名ヲ入京セシメ且  
仁川碇泊ノ露艦「ホヤリン」ニハ定員外ノ水兵百二  
外務省

十八名士官二名乗組ニ居レリ如斯各國兵ノ入  
京ハ其目的万ノ危險ニ備フル為メ單ニ公使館  
ノ護衛及臣民財産ノ保護ニ過キサルヲ以テ何  
等顧ルニ足ラスト雖モ露國ノ増兵ニ是ト其趣  
ヲ異ニシ何時政治上ノ意味ニ変スルヤヲ保シ難  
ケレハ林公使ハ如何ナル事變ニ遭遇スルモ全局  
ヲ制シ一般ノ秩序ヲ保持スルニ足ルヘキ兵力ヲ京  
城ニ有スルノ急ヲ電禀セリ

帝國政府の時期、到来ヲ待テ出兵スルノ決心ヲ有シタリシカ、万一其以前ニ於テ韓國ニ於ケル日露兩國兵ノ間ニ衝突ヲ起スガ如キコトアラハ、平和的交渉ノ進行ニ多大ノ不利ヲ與フル故、極力之レヲ豫防スベキコトヲ命ジタリ

已ニシテ二月六日日露ノ協商ハ遂ニ不幸ナル結局ヲ見ルニ至リシカハ、歩兵四個大隊ヨリ編成セラレタル先發隊ハ木越少將ノ指揮ノ下ニ仁川ニ向ヒ瓜生少將ノ率フル艦隊ニ護衛セラレテ二月八日午後六時二十分無事同

外務省

地ニ到着シ直ケニ上陸ヲ開始シ九日午前二時三十分全部其上陸ヲ終了セリ、木越少將ハ同日京城ニ入レリ之レ實ニ日露ノ平和關係斷絶以後ニ於テ我兵カ韓國ニ入レル最初ノ時期ナリトス



日韓秘密條約議定書調印の時期

日露ノ交渉ニ際シ韓國皇帝ヲ我方ニ引付ケ置  
クハ帝國ノ政策上極ノテ緊要ナルカ故ニ小村外務  
大臣ハ明治三十六年九月二十九日日韓秘密條約  
締結ニ関シ林公使ノ意見ヲ徴シタリ 同公使ハ  
韓帝ノ優柔不斷ニシテ事後ノ利害ヲ以テシテ  
ハ到底説破スヘカラサル知り交換問題トシテ

外務省

一韓帝ノ最モ忌々亡命者ニ對シ韓帝ノ満足

スル高率制ヲ加フルコト

一財政ヲ補足スル為メ巨額ノ借款ヲ供與スルコト

一相當ノ運動費ヲ韓帝ノ勢力者ニ與フルコト

ヲ提出シ對露關係ニ多大ノ影響ヲ及ホサルヲ

田ニ於テ京城駐劄ノ我守備兵ヲ増加シテ威力ヲ

示シ以テ秘密條約ノ成立ヲ計ルノ外他ニ途ナキコ

トヲ答申セリ 爾來日露ノ交渉漸ク切迫シ未

リタルニ從ヒ密約締結ノ必要亦益々加リ前ノ條

件ヲ以テ之レヲ締結スルコトニ決シタレバ韓廷ハ上トヲ  
 通シテ形勢ニ傍觀ヲ之レ事トシ 且戰ヲ競々ト  
 ル有様ナリシカハ林公使ハ李址鎔 閔泳喆其他ノ  
 大官等ニ對シテ説ク所アリ 殊ニ亡命者ニ關シテ  
 ハ國法ノ許ス限リ之ヲ嚴重ニ處カスヘキヲ提議セシ  
 カハ韓廷ニ於テモ示漸ク日本ニ信賴スルノ意ヲ固  
 フスルニ至レリ 三十七年一月十九日李址鎔 閔泳  
 喆及李根澤ノ三名ハ韓國皇帝ヲ密約締結  
 外 務 省  
 ノ御委任狀ヲ得テ我公使館ヲ訪ヘリ 林公使ハ自  
 ラ起草シタル密約案ヲ示シタルニ彼等ハ又對案  
 ヲ提出セリ 此ノ案ヲ見ルニ單ニ李址鎔一人ノ名ヲ  
 記載スルノミニシテ又其ノ條項モ甚不充ナル点  
 ヲ多クレバ修正ノ為メ時日ヲ遷延セハ外間ノ故障ニ言  
 リ意外ノ蹉跌ヲ来スノ慮アルヲ以テ啖嗟ノ間ニ訂結  
 スルヲ利トシ交渉漸ク進ミ將ニ調印セラレントセリ  
 此時ニ當リ李容弼ノ妨害ニ加フルニ局外中ニ對ス



ル帝國政府、回答ヲ得タル後、調印セントシテ議韓  
廷ニ起リ、次テ韓帝ハ前ノ決意ヲ翻シテ、断然調  
印ヲ拒絶シ、以上三人モ亦危地ニ陥リシガ、林公使ハ  
ソノ勢力ノ失墜ヲ防止シ、日韓同盟條約ハ漸ク追テ  
歩ク進ムルコトヲセリ。然ルニ日露ノ平和關係遂ニ  
断絶シテ、以テ我軍隊ハ韓國内ニ於テ活動ヲ始メ  
タレ、凡テ韓國皇室並ニ臣民ニ對シ何等ノ行動ヲ採  
ルニアラサルコトハ、韓帝ニ於テモ能ク了解セラレ、一  
般

外 務 省

ニ韓人ハ我軍隊ノ入京ヲ歡迎スルカ如クニシテ、韓國  
ノ上下共日本ニ帰服シ、日韓兩國ノ提携ニ異論ヲ  
唱フル者ヲ見サルニ至レリ。茲ニ於テ二月十三日外  
務大臣李址鎔ハ林公使ヲ訪問シ、曩ニ調印ヲ延引  
シタル密約ノ交換ヲ申込ミタリ。然ルニ當時ハ已ニソ  
ノ情勢ヲ異ニシタレハ一層進ミタル詳細條約案ヲ  
提出シ、數ヶ月經テ二月二十三日調印ヲ了セ  
リ。其議定書左ノ如シ。

議定書

大日本帝國皇帝陛下ノ特命全權公使林權助及  
大韓帝國皇帝陛下ノ外部大臣臨時署理陸  
軍參將李址鎔ハ各相當ノ委任ヲ受ケ左ノ條款  
ヲ恆定ス

第一條

日韓兩帝國間ニ恒久不易ノ親交ヲ保持シ東洋  
ノ平和ヲ確立スル為メ大韓帝國政府ハ大日本  
帝國政府ヲ確信シ施政ノ改善ニ関シ其忠告ヲ  
容ルル事

外務省

第二條

大日本帝國政府ハ大韓帝國ノ皇室ヲ確實ナ  
ル親誼ヲ以テ安全保障ナラシムル事

第三條

大日本帝國政府ハ大韓帝國ノ獨立及領土保  
全ヲ確實ニ保證スル事

第四條

第三國ノ侵害ニ依リ若クハ内乱ノ為メ大韓帝國ノ皇室ノ安寧或ハ領土ノ保全ニ危険アル場合ハ大日本帝國政府ハ速ニ臨機必要ノ措置ヲ取ルシ而シテ大韓帝國政府ハ右大日本帝國政府ノ行動ヲ容易ナラシムル為メ十分便宜ヲ其ル事

大日本帝國政府ハ前項ノ目的ヲ達スル為メ軍略上必要ノ地点ヲ臨機收用スルコトヲ得ル事

外務省

第五條

兩國政府ハ相互ノ承認ヲ經スシテ將來本條約ノ趣意ニ違反スルキ條約ヲ第三國トノ間ニ訂立スルコトヲ得サル事

第六條

本條約ニ關聯スル未悉ノ細條ハ大日本帝國代表者ト大韓帝國外務大臣トノ間ニ臨機協定スル事

明治三十七年二月二十三日

特命全權公使林權助

在韓日本  
帝國特命  
全權公使

光武八年二月二十三日

外部大臣臨時署理陸軍參將李址鎔

外部大臣  
李址鎔

而シテ右議定書ハ我國ニ於テハ二月二十七日ノ官報ヲ以テ發表シ韓國ニ於テハ三月八日ノ官報ヲ以テ之レヲ發表セリ

外務省

露韓條約廢棄ノ時期

日韓兩國ノ間ニ秘密條約締結セラレ露韓兩國ハ  
各々ソノ使臣ヲ撤退セシメタル事情ニ顧ミ露國  
ト韓國トノ間ニ成立シタル通商條約其他ノ合同條  
約ノ無效ニ歸スヘキハ明カナレトモ尚多少反對ノ理  
由ナシトイフヘカラスルカ故ニ韓國政府ヲシテ公然  
是等條約ハソノ效力ヲ失ヒタルト旨ヲ宣言セシム  
ルコトヲ必要ト認メ在韓林公使ハ小村外務大臣ニ  
進言スル所アリタリ之レニ對シ外務大臣ハ其意見

外務省

ヲ同フシ只時期ノ到来ヲ待ツベシナリシカ已ニシテ三  
十七年五月ニ至リ露國ノ海陸共ニ大敗ヲ蒙リ韓  
國上下ノ民心益々我ニ歸依スルニ至リシハ遂ニ林公  
使ヲシテ韓國政府ト露韓條約廢棄ノ宣言ヲ  
ナスヘキ交渉ヲ開始セシメタリ

韓國外務大臣ハ林公使ノ交渉ニ同意ヲ表シ  
同年同月十七日皇帝ハ特ニ秘密御前會議ヲ

開カレテ之ヲ議シ翌十八日夜官報號外ヲ以テ  
勅宣書トシテ尤、如ク發表セラレタリ

### 勅宣書

一従来韓露兩國間ニ締結シタル條約ト協  
定ハ一体ニ條止シ全然無効トスルコト

一露國臣民若クハ會社ニ認許セル特許合同中  
今ニ至テ尚ホ其期限内ニアルモノハ自今以  
後ハ大韓政府カ以テ妨ケナシトナスモノハ前ノ

外務省

如ク其認許ヲ繼續享有セシムルモ豆滿江  
鴨綠江樺皮島森林伐植ノ特許ニ至テハ  
元來一個ノ人民ニ許諾セシモノナレバ實ハ露  
國政府カ自ラ經營ヲ為スノコトナラス該特  
許規定ヲ遵行セシテ擅ニ侵占的行為  
ヲ為セシニ付該特許ハ之ヲ廢止シ全然施  
行セサルコト

右宣言ニハ前文即チ理由書ヲ附セザリシヲ



以テ外務大臣ハ林公使ニ命ジテ速カニ理由書ヲ  
發表スル様勸告セシメタルニヨリ五月十八日ノ日附  
ニテ同月二十四日ノ官報ニ掲載セラレタリ

大韓政府ハ日本カ露國ニ對シ戰ヲ宣シタルハ一  
大韓ノ独立ヲ維持シ東洋全局ノ平和ヲ確立  
スルニ在ルヲ思ヒ曩ニ議定書ヲ訂結シ俄カ  
以テ日本ヲシテ交戦ノ目的ヲ達スルニ便ナラシ  
ムルニ在ルヲ露公使館ヲ撤退シタリ故ニ韓國

外務省

露國ノ外交關係ハ實際ニ於テ斷絶シタルモ尚  
將來我カ大韓ノ位置ヲ明白ニシ且露國ヲシ  
テ從來ノ如ク條約特許合同等ニ藉口シ侵  
畧的行動ヲ再ヒスルコトナカラシメンカ為メ茲  
ニ外部大臣ハ勅宣書草案ヲ議政府會議ニ  
提出シ經議ノ後議政府參政ト連名上奏シ  
裁可ヲ經タリ

露國軍隊ト韓國軍隊トノ間ニ

戦闘ヲ開始シタルノ時期

明治三十七年日露ノ戦争開始セラレテヨリ露國  
軍隊ト韓國軍隊トノ間ニ起レル最初ノ戦闘ハ同  
年五月十九日咸鏡南道咸興ニ於ケルヲモトス  
茲ニ其時以前ニ於テ北韓方面ニ於ケル露兵ノ行動  
ノ般ヲ序レ次ニ右戦闘ノ情况ニツキテ述ヘントス

明治三十七年一月露國ハソノ韓國々境ニ近キハ  
外務省

キエフスコニ旅團ヲ置キ三四千ノ兵ヲ駐屯セシメタリ  
同年二月下旬ニ至リ露國騎兵五十名豆滿江ヲ渡  
リテ雄基灣ニ来リ三月ニ入リテ約七十名ノ騎兵  
鏡城流津浦ニ達セリ然ルニ暫クニシテ以上ノ露  
兵ノ大部分ハ北ニ去リ同月中旬鏡城及富寧  
ニ殆ト露兵ヲ見ス只僅ニ鍾城ニ二三十名ノ留  
マレルノミ

先ニハヨキエフスコニ置カレタル旅團ハ浦塩ニ移リ

豫備後備ノ兵ヲ以テ之レカ補充ヲナセリ

我カ威興派遣隊ハ四月四日同地ヲ引揚ケタリ

露軍ハ三月中旬以向ハ單ニ偵察ノ為ノ騎兵ヲ雄基

鏡城附近ニ出スニ過キサリシカ四月十二日ニ至リ約五

十騎鏡城ニ入り十四日ニ更ニ吉州マテ南進シ十六日

城津ニ到着セリ 在城津ノ我領事館員ハ先之

居留民ヲ率ヒテ元山ニ引揚ケタルヲ以テ露兵ハ日

本人家屋ニ火ヲ放チテ翌日退却セリ

外務省

四月十二日以後鏡城ニ露兵陸續未着シ五月

上旬ニハ五百ヲ超シカ同月中旬ニ至リテ約半數ニ

減少セリ

暉春ヨリ富寧ノ輸城ヲ經テ南下セル露國騎兵七

百砲十二門ハ二十日吉州ノ北インヨウドウニテ二分シ

一隊ハ甲山ニ向ヒ他ノ一隊ハ吉州ニ入り中ニ十騎ハ同日

城津ニ着セリ

五月二十日以前ニ於ケル北韓方面ノ露兵ノ行動ハ大略

以上述べタルカ如シ然ルニ突然咸興ニ露兵現レ韓國  
 軍隊ト衝突セルアリ此ノ露兵ハ北方ヨリ南進シ来レル  
 モニアラスシテ五月十日安州ヲ籠撃セル騎兵ノ同地  
 ニ於テ我兵ノ為メ敗ラレタルモノカ此方面ニ敗走シ来レル  
 モノナル一クナハ日咸興外一ボリニ泊シ翌三日午後七時  
 遂ニ入城セリ同地ニ於ケル韓國軍隊ハ之ヲ防止セシカ  
 為メ約一時間接戦シ露兵ヲ城外ニ撃退セリ此戦  
 鬪ニテ韓兵一名戦死シ露兵一名重傷ヲ負ヒリ  
 外務省  
 此ノ咸興ニ於ケル衝突ヲ以テ露韓間ニ戦鬪ヲ開始セ  
 ル最初ノ時期ナリトス

